



パイプオルガン「ルナ」のひみつ vol.1「チャペルの響き」

神戸国際大学オルガニスト ミリアム 伊藤純子

本学チャペルでオルガンを聴いた人なら誰でも、その音響の豊かさを体感されることでしょう。オルガン演奏の感想文の中にしばしば見られる言葉として「身体ごと音色に包まれる」「温かい響きが天から降ってくる」といった表現があります。私はパイプオルガンのある聖堂には数多く足（耳）を運んできましたが、確かにこのチャペルの音響の豊かさは格別です。この響きの「ひみつ」について、ひも解いていきたいと思います。

1 チャペル設計ものがたり

本学のチャペルは2002年に竣工されました。チャペルを設計するにあたり、当初よりオルガン設置プランがありました。そのため、オルガンの響きにとってどのようなチャペル設計が効果的かという点について、非常に綿密で根気強い研究と調査が行われました。竹中工務店の音響デザイナーと本学関係者との相互協力により、具体的なシミュレーション体験を伴う話し合いが何度も重ねられたほか、オルガン製作会社である米国のC.B.フィスク社のスタッフによる熱心で具体的な助言も加わりました。

チャペルは祈りの場所なので、もちろん言葉がクリアに伝わる必要があります。大学チャペルとして、学内外に求められる目的や使命と照らし合わせ、この場に相応しい響きを実現させていくための熱い議論と試行錯誤の末、現在のチャペルの形が誕生しました。

2 チャペルの音響のからくり

竹中工務店独自の音響設計技術の賜物として、現在のチャペルの音響が設計されました。ヨーロッパの大聖堂などに響く、豊かで繊細なオルガンの音響のイメージを、小さな聖堂で実現させるためには、たくさんのからくりが必要でした。そのからくりの幾つかは現在チャペルに入れば目視で確認することができます。それは、

- ① 天井と壁が、斜めに傾いている（水平・垂直の面は皆無）
- ② オルガンから遠い場所にある祭壇上に、高さ21メートルの吹き抜けがある

上記の点は視覚的にも天井の低さを感じず、実際より広々とした感覚を得られる要因でもあります。

3 そびえ立つチャペル

オルガン導入前のチャペルを私が初めて訪れた際、オルガン設置予定のくぼんだ空間がチャペル内にありました。その時に感じたチャペルの大きさと、その後オルガン設置後に感じたチャペルの大きさとを比較したとき、オルガン設置後のほうが格段に大きく広々となったように実感したものです。つまり、視覚的にも聴覚的にも、実際のサイズよりも空間が大きくなったということになります。

ヨーロッパの大聖堂が天高くそびえ立つ設計となっている理由の一つとして、祈りが天に届くよう、天と地が繋がっているような感覚を信徒が持つためであるとの話を聞いたことがあります。

このようにして、音響のためということが理由の入り口でありましたが、結果的に天と繋がる広々とした異空間が誕生しました。

下:パイプオルガン（祭壇側から） 右:神戸新聞2006年6月18日

